

文学作品に現れる中国残留孤児表象

文学作品に現れる中国残留孤児表象

教育学部国語国文学科 井上 詩乃

目次

はじめに

第一章 「大地の子」の検討

1, 題材選択、執筆意図

2, 『大地の子』と『卡子』の比較

3, 先行研究における評価

第二章 引き揚げ文学の中に見える残留孤児問題

1, 「引揚げ文学」論による中国残留孤児文学の位置づけ

2, 藤原てい『流れる星は生きている』と『大地の子』批判の共

通項

3, 相星雅子『みなみのポプラ』から見える残留孤児たち

第三章 日本語学級での中国残留孤児とその二世 「ぼく、日本人なの？

中国帰りの友達はいま…」

1, 構成、内容の分析

2, 登場人物たちの設定整理、実態との差異

3, この本の著者や関連著書の分析

第四章 各章のまとめと結論

終わりに

はじめに

戦後、多くの日本人孤児が満州（現中国東北部）に取り残され、その中には帰国後も社会的・心理的困難に直面した人々がいた。この問題はすでに半世紀以上前の歴史に属するが、今日においても考える意義は大きい。現代社会では、異なる文化や言語背景を持つ子どもたちが共に学び生活する機会が増え、多文化共生の課題が顕在化している。中国残留孤児の体験は、言語・文化の違いによる疎外、教育制度の不備、心理的孤立など、現代にも通じる問題の先行例としても捉えられる。長い時間が経過した今だからこそ、当時の体験がどのように語られてきたかを概観し、その語りを通して社会や教育の課題を考えることに意義があるといえるのではないだろうか。

これまで学術研究やフィクション、ノンフィクションを問わず文学作品あるいは放映作品などで、さまざまな観点から中国残留孤児が語られてきた。はじめにではどのような作品があるのか筆者が調べ得た範囲で分類し、まとめていきたい。

一つとしてまず挙げられるのは、日本人全体が避けがたく直面した戦争の被害者としての中国残留孤児であろう。異郷の地中国での苦難、肉親捜しと日本への帰国等について描いた作品は数も多く特に山崎豊子（1991年）『大地の子』（1990年）『忘れられた女たち…中国残留婦人の昭和』等が著名である。

これらは大まかに帰国前の残留孤児を描いた文献として分類できる。一方、帰国後の残留孤児について描いた文献はどのようなものがあるか、以下で整理する。

一つには日本語教育という観点から研究、体験談などをまとめた書籍が多く見受けられる。政府や多くの教育機関においては帰国後の中国残

留孤児たちにとって最も喫緊の課題は日本語の習得であり、その後就労学業の問題はおのずから解決されるという見方が主流であったようだ。そのためか、日本語教育を通じた日本への同化という観点から彼らの実態を把握すべく行われた調査も多い。田中望・藤田正春(1983)「中国帰国者用日本語教材の開発」小林悦夫(1990)「中国帰国者に対する日本語教育の目標と試み」などがある。

もう一つには帰国後の具体的な生活実態などを取り上げたものである。平井美帆(2015)『中国残留孤児70年の孤独』多くの帰国者の日本語教育の受け皿となった夜間学校を舞台としたNHKドラマスペシャル(1984)『雨ふりお月さんー私に日本語下さい』、公立小学校の日本語学級を題材にした手島悠介(1984)『ぼく、日本人なの？中国帰りの友達はいま…』等が出版されている。

また国家に対し責任追及を目的とした訴訟に関連する作品も多い。中国「残留孤児」国家賠償訴訟弁護団全国連絡会(2010)『政策形成訴訟ー中国「残留孤児」の尊厳を求めた裁判と新支援策実現の軌跡』、ルポ作品である菅原 幸助(2009)「中国残留孤児裁判…問題だらけの政治解決」などがある。国家賠償請求の訴訟は最終的に全国15の地方裁判所で、約2,200名もの永住帰国者が原告として立ち上がった。近年の残留孤児に関わるトピックとして重要なものである。

もちろん帰国前、帰国後にまたがって記された本もある。有名なものとしては城戸久枝(2007)『あの戦争から遠く離れてー私につながる歴史をたどる旅』や井出孫六(2004)『終わりなき旅「中国残留孤児」の歴史と現在』などが存在する。

しかしながら、こうした文学作品や社会的イメージの中で注目され、光を当てられてきた部分は一部に偏っているのではないかと考える。たと

えば「成功した帰国」「日本社会への同化」などが強調される一方で、その背後にある孤立や葛藤、声なき当事者の視点は十分に掬い取られていない。そこで本稿では、既存の表象の偏りを意識しつつ、多様な作品・証言・研究を横断的に検討し、中国残留孤児・帰国者がいかに語られてきたのか、その語りの構造と変化を明らかにしていく。

なお、中国残留者を包括的に指す呼称としては、残留を余儀なくされた日本人全般を指す総称として、孤児だけでなく、現地で生活手段を失い結婚した女性や、種々の事情で残留した男性なども含む「中国残留邦人の方が正しい」という論もある。しかし本稿では社会的表象および作品タイトル等における使用実態を重視し、一般に定着した「中国残留孤児」という呼称で統一する。

第一章 「大地の子」の検討

『大地の子』は『文芸春秋』誌に昭和62年(1987)から平成3年(1991)にかけて連載され、中国残留(戦争)孤児である陸一心の半生を描いた作品である。山崎豊子が八年の歳月を費やした大河小説であり中高年層を中心に高い知名度を持っている。

山崎豊子は大学病院の医療ミスと裁判を題材にした『白い巨塔』日本航空123便墜落事故をモデルとした『沈まぬ太陽』など社会派の問題作を描くことで有名な作家である。本作はシベリア抑留について扱った『不毛地帯』、第二次世界大戦に翻弄される日系アメリカ人二世をテーマにした『二つの祖国』に続き執筆されたもので、これら三つをあわせ『戦争三部作』とも呼ばれる。

『大地の子』は当時の中国共産党総書記胡耀邦の協力を受けた作者が34年にわたり、およそ300人の中国残留孤児からのインタビューなど綿密な取材を行い書き上げたことも知られ「中国研究、中国理解の裾野を拡張」¹⁾、「大地の子」でとらえ直された「文化像」は日中の相互理解を深め、日中友好を結実させたと考えられる。²⁾とされ、中国残留孤児問題の周知につながったと評価されている。そのため先行研究には日中関係、文化交流に着目した研究も多い。

作品冒頭において「すべて事実に基づいて再構築したフィクションである。」とする本作は一方でその虚構性についてモデルとなったと思われる人物や識者から数々の批判がなされてもおり、参考文献の比較研究のなかでも特に盗作疑惑によって東京地方裁判所で争った遠藤誉の著作『卡子 出口なき大地』と比較して分析するものなども目立つ。

本稿では『大地の子』についての基本情報についてまとめ、執筆の背景

や先行研究について分析し、今まで何が問題とされ、どのような議論がなされているのか、また『大地の子』の構成意図などについて探る。

そのうえで『大地の子』で表現された中国残留孤児像と、描かれなかったものについて検討していきたい。

1、題材選択、執筆意図

本節では『大地の子』はどのような目的意識をもって書かれた作品であるのか山崎豊子の自著などを中心に検討していきたい。まずは執筆のきっかけとなった出来事からさかのぼって確認していく。

山崎と中国の関わりについては、1983年、中国作家協会の招きで訪中し、文化大革命で迫害された作家巴金と面会したことに始まる。1984年に山崎は中国社会科学院外国文学研究所の日本文学研究組から招待を受けた。

そこで北京人民文学出版社の幹部は山崎に、中国の政治情勢などに左右されない日本人作家の立場から、中国人を題材にした小説を書いてほしいと頼まれ、宋一族の次女で中国革命の父・孫文と結婚した女性である宋慶麗について書くことを提案された。山崎は「いえ、私にはとても中国人を書けません」と辞退すると、「何をいっているのですか。あなたは『二つの祖国』でアメリカを書いたじゃありませんか。アメリカが書いたのにどうして中国は書けないんですか」と言われた。山崎はそれはアメリカ人ではなく日系アメリカ人の話だと答えた後、初めて『大地の子』の着想を得たとする。

「そうだ、戦争孤児を主人公にすれば書ける、と思ったんです。でも戦争孤児そのものについては、手記や体験記がたくさん出ている。これだけでは戦争孤児物語になる、何か大きなテーマに繋がっていかない：

…あ、そうだ、いま日中の中で宝山製鉄所のプロジェクトが進行している。この宝山を舞台に、父は日本の企業を背負い、子は党と国家を背負って相まみえる。そのテーマがひらめいたのです。」

としている。『大地の子』執筆にあたっては胡耀邦総書記が中国残留日本人への現地取材を特別に認め、取材への全面協力を得られたことが大きく関わっているとされる。山崎と胡総書記は三度にわたって会見をし、「内蒙古の寧夏回族自治区にある監獄で、アメリカの司法視察団も見学が許されなかった内部取材を特別許可された」¹など破格の対応を受けている。

このような好待遇の一因には、『大地の子』が執筆された1980年代が「日中友好」の機運がかつてないほどに高まった時代であったことだと考えられる。日本の中曽根首相と中国の胡耀邦総書記が行った首脳会談では「平和友好」を掲げ、主に経済などの観点から結びつきを強めていった。胡耀邦は日中友好「21世紀委員会」の設立や3000人の訪中受け入れなど日中関係の強化に尽力した。

山崎が執筆当初から日中共同の宝山製鉄所プロジェクトを中国残留孤児の物語と接続しようという発想に至っていたことなども含め、『大地の子』は一貫して「日中友好」の時代を後押しされた作品であるということが出来るだろう。

『大地の子』は1995年NHKの放送70周年記念番組として日中の共同制作によりドラマ化された。その冒頭においても「悲惨な戦争を生き抜いた人々の苦しみと戦火の中でも消えなかった大地の人々の恩愛を永く心に刻み、日中友好の証として捧げます」としているなど「日中友好」をテーマの一つと考えてよいように見える。

この事柄についてどの程度意識しながら執筆は進められていたのか。

『山崎豊子 作家の使命 私の戦後』には胡総書記との初めての会見の出来事に置いて語られている。胡総書記が「中日友好のために小説を書くそうだが、できる限り協力する」と言ったのに対し山崎は「いえ、スローガンで小説は書けません。書いた結果として日中友好のためとなれば」と答えている。日中友好という題目によりすぎることなく、あくまでもフラットに現実を描くことを重視していたということである。実際『大地の子』には文化大革命など中国の負の歴史にも焦点をあてている。そのことを胡総書記や中国側が許容し、取材に協力したことで『大地の子』は完成した。

山崎の中国取材はどのように行われていったのか。山崎は約三年にわたり、北京、東北、西北、重慶、桂林、新疆、広州、寧夏、内蒙古、重慶、武漢、上海など中国全土を渡り歩き、中国の残留孤児約300人に取材した。また巻末に示される参考文献も膨大で「文革関係」二十四冊、「現代中国・政治、経済」十冊、「満洲開拓団、逃避行、残留孤児」二十冊、「評伝」十五冊、「紀行、生活」十冊、「小説」（注・中国の小説）十五冊、「鉄鋼」六冊といった内訳で、その総数は百六冊にもものぼる。

⁵唐楚輝は作品と直接の関係がある17冊の参考文献と作品の対応関係について調べ、山崎がそれをどのように取り入れ、あるいは改編していったのかを分析した。その17冊の中でも特に重要と考えられるのが、『卡子』（遠藤誉著）、『土牢情話』（張賢亮著）及び『天雲山伝奇』（魯彦周著）であるとし、これら三つから『大地の子』の「長春戦役」や「文革」、「製鉄所建設」といった重要な場面の設定や内容を撰取しているとする。

山崎は現地でおよそ300人以上の中国残留孤児への取材を行ったが、特に主人公の陸一心のモデルとなる人物については詳しく取材を行った。モデルとされる人物については先行研究にて張永海、紅谷寅夫、劉奔、

王同山、王書海、張賢亮などが挙げられている、陸一心の人物造形や物語全体のストーリーについては、特定の一人の取材結果や参考文献をそのまま利用したわけではなく、複数のエピソードを場面場面で組み合わせ、再構築したということがわかる。」

しかしこのモデル選定においては、中国取材以前から既に宝山製鉄所のプロジェクトをめぐって父は日本の会社員として、子(主人公)は中国共産党の党員として国を背負い対峙するというプロットが出来上がっていたため、山崎には中国残留孤児でありながら中国において高等教育を受け、党員となった人物を見つけ取り上げたいという思惑があった。

そのことは山崎が中国取材に出発する前に京都大学の竹内実教授と会食した際のエピソードとして「先生が、高等教育を受けて党員になった戦争孤児はいない、行くだけ無駄だよ」とおっしゃったんです。「這いずり回るつもりで行けば、なんとかなるんじゃないでしょうか」と私が言うと「壮大なる失敗作に乾杯！」とおっしゃった」と語ったところにも表れているようにと思われる。当然ながら「小日本鬼子」と呼ばれ、攻撃されてきた中国残留孤児たちの中から、こういった中国社会において社会的成功を納めた人物を見つけることの困難さは山崎自身も取材前から認識していたことがわかる。

中国残留孤児二世である大久保明男は陸一心のように中国の養父母に恵まれ、最終的には自ら中国に残る決断をする中国残留孤児をいえないとは言わないものの、そのような例は決して典型ではないとし、

「やさしい中国人養父母にわが子のように育てられ、大学まで行かせてもらった陸一心のようなめぐまれた経歴を持つ人は、「残留孤児」のなかにいったい何人いるだろうか。中国人農民に拾われ、労働力として農作業に従事させられ、小学校すら行くことができず、読み書きも

できないのは、多くの「残留孤児」が抱えている現実である。人間愛の限界や人間の醜さ、悪徳などが存在したことも見落としてはならない。その「暗部」への照射が『大地の子』には極端に欠けている。」と評価した。

またモデルの一人と思われる劉奔（残留孤児であるが中国人として育てられ、中国社会科学院哲学研究所に教授として勤務、中国共産党員でもあった。陸一心の設定上の類似点が多い）は山崎の取材方法に以下のような疑問を呈している。

「山崎氏は現実には起きてもない実に奇々怪々な状況をあらかじめ設定して、主にその設定の下にのみ養父に質問を向けてきた」とする、その質問については

「もし仮に、あなたが長春の小学校の先生をしていたとして、その時長春が包囲され、何も食べる物がなく市民は飢餓に苦しんでいたとしましょう。このような状況の下で、もし一人の子供に食べさせてあげる程度の食べ物しかなかったとしたら、あなたは養子に食べさせますか、それとも他の子供にあげますか」というようなもので、長春においてそのような経験をしたことのない劉奔の養父は「私はそのような目にあつたことがない」と回答を避けている。こ

このような取材に対し劉奔はもとも山崎氏が劉奔と養父を訪問する前、つまり『大地の子』の執筆を計画した時には、すでに遠藤作品を読んで、卡子を見せ場としたストーリーを着想していた。したがって自分の小説の主人公・陸一心を、包囲され塞がれた長春という歴史的な背景にはめ込み、陸一心にもまた『卡子』の主人公である遠藤誉と同じ道を辿らせ、同じ苦難に遭遇させることをもくろんでいたと考察したうえで、

「日本の敗戦後、長春の長期包囲の歴史を経験し、かつ『卡子』を出た

日本人孤児が何人かでもいただろうか。万が一いたとしても、それは例外中の例外であり、したがって残留孤児の生活を客観的に反映させる目的からすれば、卡子を通った孤児を設定しても、孤児たちのいかなることをも象徴的に表現することはできない。」^二
と批判している。

山崎の中国取材は多数の中国残留孤児の実態について取材し、胡総書記の協力によって今まで触れることのできなかつた文化大革命などの中国の暗部について明らかにしており、それを評価する声も多い。しかし上で挙げた通り『大地の子』において最も焦点をあてられた陸一心の人物像については、あくまで自身のプロットありきのもので必ずしも誠実な取材とは呼べないのではないかという意見もある。

2. 『大地の子』と『卡子』の比較

遠藤誉作『卡子 出口なき大地』（1984-85）は1948年中国国民党軍によって統治されていた長春を、中国人民解放軍が包囲した長春包囲戦を題材にしたものである。この戦争で中国人民解放軍は中国国民党軍に対し兵糧攻めを行い、兵に国民党軍からの離脱を促した。兵糧攻めの効果を万全にするために人民解放軍は民間人も長春から離れることを防ぎ、結果として推定¹⁵万人もの民間人が餓死したともいわれる。卡子とは軍の検問所のこと、長春を抜け出すために通らなければならなかった。『卡子』は著者が父とともに長春に閉じ込められ、八路军（人民解放軍）の卡子から命からがら脱出した経験が描かれている。

『大地の子』の序盤にも陸一心が養父である陸徳志に助けられながらなんとか長春を脱するという場面がある。その場面における描写や設定に多くの共通点があることが指摘される。例えばこの場面の著者の年齢

と陸一心の年齢は同じく「歳、一緒に長春から抜け出す父親の人物造形も双方が温厚篤実な性質であることを強調されている。また文章やさしはさまれるエピソード自体に似通っているところも多く、長春の食糧不足の状況や先住していた市民から「そのうち人の物を奪う側に回るようになる」と警告されるシーンなど『卡子』を参照したとわかる部分が見られる。

このことから遠藤は山崎の盗作についての証明を行うために『卡子の検証』（1997）を出版し、著作権侵害として提訴した。しかし2001年の東京地方裁判所第一審の判決により、原告である遠藤は敗訴、遠藤の著作の依拠を否定した山崎の全面勝訴となった。

判決では『卡子』について「このようなノンフィクションの性格を有する著作物において歴史的な事実に関する記述部分について：記述された歴史的な事実を、創作的な表現形式を変えた上、素材として利用することについてまで、著作者が独占できる（他者の利用を排除することができる。）と解するのは妥当とはいえない。」¹²とし「一般に、作家は、小説を執筆するに当たって、読者に対し、最も効果的に、テーマを伝え、

感動を与えることができるよう、ドラマチックなストーリー展開を案出し、各種の登場人物を創出し、人物の性格、思想、行動、人間関係等を設定するなど、知識、経験及び創造力を尽くし、創作的な工夫を凝らして、作品を完成させるものであるといえる。：他者の先行著作物で記述された事実と内容において共通する事実を取り上げたとしても、その事実を、いわば基礎的な素材として、換骨奪胎して利用することは、ある程度広く許容されるものと解するのが妥当である。」¹³として翻案権を認めている。つまり東京地方裁判所は山崎の『卡子』の参照について類似点がある程度認めつつ、『卡子』の利用は『大地の子』の創造的なテ-

マを効果的に表現するものでフィクションを描く小説家としての山崎を認めていることがわかる。

鵜飼清は先述の東京地方裁判所の判決について山崎作品の特徴である「登場する人物、関係機関なども、すべて事実に基づいて再構築したフィクションである」という視点が欠けていると批判する。また、『大地の子』に「取材に基づかないものはない」と宣伝する山崎が描いた事実についても検討が必要であり、その是非は作品のテーマである「中国残留孤児」を描いているかということに集約されると主張する。¹⁴ 鵜飼は劉奔(拙劣なる剽窃行為の典型―『大地の子』を再読して思うこと 1999)などを参考としながら、『大地の子』のクライマックス、物語内で中国と日本の狭間で苦しんだ陸一心が日本の実父である松本耕次に「私は、この大地の子です」と中国に残ることを伝えるシーンに注目する。このような中国の「大地」に着目した言説は『卡子』においても散見され、山崎もそこから影響を受けこのクライマックスを設定したと考えられるが、中国大陸解放のち日本に帰還した遠藤誉と日本で生まれたが人生のほとんどの部分を中国で過ごしてきた陸一心とは状況が全く異なるとする。

遠藤は日本人の父に育てられ日本に帰還したことで、日本と中国をある意味客観的に概観し『卡子』を執筆することで幼いころに過ごした中国の「大地」と向き合ったが、日本生まれではあっても人生の大半を中国で過ごし育ってきた陸一心が中国残留を決意するのは中国の「大地」ではなく、日本人である自分を育ててきた養父母を初め、友人や先生などより具体的な実生活に根差すものである方が、中国で社会的生命を得て、育てられた残留孤児の内的世界としてはより自然であり、「それを自分を生み育ててきた大地への郷愁そのものとして描写し位置づける：これこそが「読者への欺き」ではないのか」¹⁵とし、『大地の子』中国残留

孤児の実情を描けているとは言えないとする。

3、 先行研究における評価とまとめ

前節で鵜飼の論を挙げたが『大地の子』のクライマックスについては多くの先行研究がふれている。日中文化交流・「中国残留孤児」問題を研究する大久保明男も、「多くの残留孤児が、敗戦の混乱や逃避行の修羅場をくぐり抜け、その後の差別や疎外に耐え生きてきた中で「落葉帰根」(落ちる葉は樹木の根に帰るということ)を心の支えとしてきた」¹⁰⁾。という現実も踏まえ、中国で日本人の血が流れていることによって苦しめられてきた陸一心がこのような決断をすることは、典型的、一般的な中国残留孤児の姿と異なっていると指摘する。

肯定的意見について挙げると、唐楚輝は前述の劉奔、大久保明男の批判を踏まえ、『大地の子』には主人公の妹で養父母に虐待を受け悲劇の死を遂げる張玉花など残留孤児の境遇についても描写しており、幸運にも中国で社会的地位を築くことができた人々にもしっかりと取材を行った上の執筆であるため現実に即していないとの批判は妥当でないとする。そしてなぜ、山崎が取り上げたのが一般的典型的な中国残留孤児ではなかったのかについては山崎自身が「戦争孤児物語だけなら、すでに多くの優れた体験記が出ている。体験者の手記、これはやはり血がしたたつています。今から小説を書くからには、何かドラマチックなテーマでなければならぬということでした。」と語っていることから「山崎の目標は従来の物語と違い、ドラマチックな作品を書くことであった。：如実に事件や人物を書く新聞記者と違い、作家は書かれないことを書くべきだと山崎は主張する。ゆえに、山崎は戦争孤児の長春戦役での遭遇、および日本に帰国せず、中国に残る主人公などの今まで書かれなかった内

容を作品に書き込んだのである。：彼女の創作理念から見れば、取材から得た出来事を踏まえた上で書く小説は、山崎自身の構想に基づいた創作である。」として『大地の子』はドラマチックなテーマを書くという山崎の創作目的を満たすものであり、本作が中国残留孤児の認知を広げ多くの人に読まれるようになる結果につながったとする。こ

ここまで『大地の子』への肯定、否定意見について挙げたが、いずれも中国残留孤児という作品のテーマとその描き方の是非について論じられていくことがわかる

1節からわかるように山崎は『大地の子』の物語がスタートする前に、モデルの選択や話の概要、着地点についてある程度見定めていた。そのことが一人の人間の人生経験を描くという従来の中国残留孤児の作品とは違う、創造的かつよりメッセージ性を帯びた人を引き付ける作品になり、日本人の残留孤児への理解を広げるとどまらず中国との交流という意味でも社会的意義を持つものになったと肯定的に評価される要因であることは明白であると考ええる。一方でそういった中国残留孤児の描き方は一部の当事者たちから見れば、自分の考えありきで残留孤児の実態を見つめているとは感じられないということにもなる。

『大地の子』は小説、フィクション作品でありその点からいえば自分でプロットを事前に考え、それを補強修正するために取材を行うというのは当たり前のことと言える。しかし、劉奔が

「当時私は、山崎氏が従事していることはきつと歴史的に重要な意義ある事業に違いないと思っていた。また、私は本当に心から日本人民に、中国人民、とりわけ養父母がどれだけ人間としての「仁」と「義」を尽くして、残留孤児を今日まで育て上げたかということを知ってもらいたいと思っていた」⁸¹

というように取材を受けた残留孤児たちからすれば、『大地の子』は小説ではなく、歴史の真実を語る自分たちの物語であるという認識であり、山崎自身の考えはともかく、読者視聴者たちに「事実を基にした」歴史の真実を取り上げた作品であるという感覚を少なからず与えてしまったことがそのような齟齬を生む結果に繋がっていたのではないかと考えた。

このように『大地の子』はフィクション作品でありながら、中国残留孤児の現実問題と強く結びついて読者に想起させるため、『大地の子』について評価する際も単にフィクション作品、ノンフィクション作品という枠組みを超えた議論が必要になると感じた。

またこうした先行研究の指摘は、中国残留孤児の表象やこのジャンル全体を検討する上で無視できない問題をはらんでいると考える。山崎は戦争孤児物語には血のにじんだ、多くのすぐれた体験記がすでに存在し、広く読まれていることを前提としている。それらとの差別化のために個々の物語を超えたより大きな物語に接続させることを意図しているのである。その象徴が宝山製鉄所であり、この物語を日本や中国の友好とといったナショナルな次元に昇華している。そのこと自体が批判を受けるものでないにしろ、そうした実態に根差した物語を期待された背景には、『大地の子』に匹敵するような物語、もしくは体験記が実際には存在せず空白化していることが考えられるのではないか。実際に一部に盗用疑惑のある『卡子』を除けば『大地の子』には他作品との比較研究がほとんど見受けられなかった。

次章では、中国残留孤児問題が戦後どのように位置づけられながら、語られていったのかジャンル全体の大きな枠組みについて、また、引き続いてフィクション、ノンフィクションの在り方について考えていき

い
。

第二章 引き揚げ文学の中に見える残留孤児問題

蘭信三は中国残留孤児表象を語る際、それらは主に三つの文脈で語られてきたとする。一つ目が「未帰還者」の引揚げ促進、二つ目が国交正常化後の中国残留日本人たちの帰国、三つめは『大地の子』や『忘れられた女たち』に代表されるドキュメンタリー的なドラマ作品だという。

19

そもそも残留孤児の存在を語る上で引揚げという事象は避けて通ることのできない問題だといえる。戦争末期から終戦直後にかけて、旧日本領（満州、朝鮮、南洋諸島など）からの引揚げは極度の混乱状態であり、特に満州でのソ連軍侵攻や現地住民の襲撃などで、多くの日本人が緊急避難を余儀なくされた。この混乱の中で子どもが中国人家庭に預けられたり、孤立したりしたことが残留孤児の主要な発生原因と言えるからである。

つまり、中国残留孤児と引揚者たちの命運は紙一重であって、そのことが引揚げ者の中には、中国に置き去りにされた多くの人たちの犠牲の上に、自分は生きて帰れたという後ろめたさを生じさせているという面もある。引揚げの苦難では、まず幼児や子どもを抱えた女性が犠牲になり、子どもが置き去りにされる場合もあった。母親が生き延びるために子どもを現地の人に託したり、仲介して子どもと引き換えに食料を得ることもあった。朴(2016)は「引揚げ文学には、「日本人同士の生き残るためのエゴイズムや葛藤」も描かれている。それが単にソ連軍や「植民地」「占領地の人々」に対してのみならず、引揚げ者同士の加害・被害体験でもあった。」としてくる。²⁰

本レポートは、一章において『大地の子』に指摘される問題点と、引

揚げ文学作品における批判の類似点を分析し、それぞれの大枠を掴んでいきたい。そのことが文学という観点から研究されることの少ない中国残留孤児問題を考察する手立てになると考える。二節では引揚げ文学作品の代表的作品とされる藤原てい『流れる星は生きている』を取り上げ、それが定住日本人の心情にどのような影響をあたえてきたか考察していく。3節においては、節で分析するような戦後引揚げ文学の文脈から離れたものとして相沢雅子『みなみのポプラ』を取り上げそこに描かれる中国残留孤児の存在をどのように捉えられるのか考察していく。

1、引揚げ文学作品と捨象される中国残留日本人

山崎豊子「大地の子」の構成、先行研究のまとめは前章において詳しく扱ったが、私が特に注目したいのは、鶴飼の「大地の子は当初より、日系二世も、日本人の血が入っているかぎり祖国である日本を愛する」という自然な気持ちを持っているはずだ。という想定から出発している」としたうえで、山崎の言う「二つの祖国」が実質的には日本という一つの祖国の存在を際立たせる効果を果たし、それが読者や視聴者のセンチメンタルな愛国心を掻き立てているとする指摘である。また山崎がそれを意図していたかにかかわらず、中国残留孤児をテーマとする『大地の子』にシベリア抑留について扱った『不毛地帯』、第二次世界大戦に翻弄される日系アメリカ人二世をテーマにした『二つの祖国』を含めた戦争三部作には、国同士の関係の上において翻弄されるゆらぎの立場の間を描いていながら、むしろ血縁的な日本人アイデンティティを強調する結果につながっているという指摘が付き纏っているようである。

南誠は中国残留日本人をめぐる言説について「日本というナショナルな言説空間において、残留日本人は救済されるべき日本人(棄民)、戦

争被害者として記憶表象され、「終わらない戦後」問題の一つとして感傷的に語られてきた。それは残留孤児独自のものというより、引揚者の記憶や表象に包摂されただけであった。：残留日本人の物語がナショナル・ヒストリーへと回収されつつも、語られた物語は「感傷の共同体」を通じて、ナショナルリズムの充足としても機能した。」という風に概観している²⁰。残留孤児表象が定住日本人のナショナルアイデンティティを満足させるような語りを集約してしまっているというのは、「大地の子」だけ、もしくは文学においてのみ問題にされてきたわけではなく、中国残留孤児表象、引揚げ者の表象といった大枠においても指摘されてきた事象であった。

なぜ中国残留孤児表象は引揚げの文脈に包摂されるのだろうか。南は引揚げ事業を日本のナショナルストーリー創設において、重要な役割を果たすものだとしている。引揚事業は海外に取り残された日本人の帰還だけでなく、日本にいる外国人の送還事業も含まれた。日本政府にとつて、引揚事業が「民族的新生への課題(引揚援護庁…1950)である」と位置づけられたように、それは「日本国民」をめぐる境界の設定や包摂と排除が行われる過程であった。つまり戦争という悲劇によって命からがら引揚げる、あるいは中国にとどまることを余儀なくされた「日本人」を同じ民族として手を差し伸べるという「国民救済」のナラティブが立ち上がり、その物語が引揚げ者、中国残留日本人という個々の区別なく包摂していった。

ところでそもそも南の指摘する中国残留日本人表象を包摂してきた引揚げ者の記憶や表象とはいかなるものを指しているのか、次章では具体的に藤原ていが満州から出発して北朝鮮経由した自身の引揚げ体験を素材に創作した『流れる星は生きている』を引揚げ文学作品の代表例と

して取り上げて検討していく。

2、藤原てい『流れる星は生きている』と『大地の子』批判の共通項

この作品は1949年に日比谷出版社にて刊行されたノンフィクション作品であり、旧満州国の都新京（現、中国長春市）に住み、27歳で3人の子供を抱えた著者が、混乱のなかで夫と離れ離れになり、幾多の困難と危機に出会いながら、朝鮮半島を歩きぬいて一年後に帰国する。²³⁵その過程を記録したものである。1949年に日比谷出版社から初版が刊行されて以降、1954年に富士書苑から『新稿・流れる星は生きている』として再刊行された。1969年には富士書苑の『大東亜戦史∞朝鮮編』に加筆された一部が「三つの国境線」として収録される。また、1963年『世界ノンフィクション全集』や1965年『昭和戦争文学全集』に抄録され、同年偕成社のシリーズとしても刊行。以降、1971年に青春出版社、1976年に中公文庫、1977年にちくま少年文庫などから出版され、2002年には中公文庫版の改版が出された。さらに、偕成社版は2015年に写真や表現を修正した改訂版が刊行されている。初版と同年に映画化され、1982年にはTBS系列でドラマ化された。

初めにこの作品が引揚げ文学作品においてどのように位置づけられるのか確認していきたい。一口に引揚げと言ってもその移動は共通ではない。A満州から北朝鮮を経由し日本に向かうルート、Bいったん満州に戻り、その後引揚げたものC関東軍を中心として、ソ連軍によって北上、いわゆる抑留からの引揚げD長い間その地で「残留」「留用」されたのち、帰国するというように主に四つの型がある。Aのルートについては、人数と伴に、体験記といった作品が最も豊富であり、『流れる星は

生きている』もこれに該当する 24

成田 によれば、引揚げの体験記は大まかに言えば、1950年前後の「体験の時代」、1970年前後「証言の時代」、1990年前後の「記憶の時代」に分割できるとした。これらの中で最も作品数が多いのが「記憶の時代」において書かれたものであって、経験当時には語ることでできなかったことを自費出版等も用いながらも世に送り出しているとする。

「体験の時代」の特徴として、自らの戦争・引揚げ体験がまだ頭の中で整理されないまま、その混乱した心情、思想をありのままに描写するという傾向の作品が多く、そのインパクト故に後世に伝わる典型的な引揚げ者像を創出する作品が作られたとする。またこの時代に限らず、引揚げ文学作品の典型として、男性の引揚げ体験よりも女性による体験記が目立つことなどがある。引揚げと言え、上からの指示もなく自力で帰還するというイメージであるが、男性の場合徴兵による動員が行われていた事情もあり、家族との生活拠点というよりも「職場」からの引揚げが多かったことを要因として挙げられる。 25

ここまで『流れる星が生きている』が現実的な境遇的にも、引揚げ文学作品としてもある種典型的な要素を持ち合わせていることについて触れてきたが、一般的とは言い難い部分として一つには、藤原が満州から三人の子を生還させたという点にあるだろう。特に三人の中で最も幼く赤子であった長女咲子はまさに「奇跡の赤ん坊」であり、道中子供を死亡させてしまった、あるいは生きて帰らせることはできないと現地中国人などに子供を預けた親の多さを考えると稀なことであったのは間違えない。私はこの作品の出版された後、一般的な引揚げ像を作り上げ、長く広く読まれてきたという点や、そもそもフィクション、ノンフィクションといった差はあるものの、一般的体験としては外れた部分があると

ころなどに『大地の子』とも共通する部分があると考えた。

成田 は身軽な人は我先に脱出しようし、子供や子持ちの母を守る意思など持たない日本人たちに対し、藤原の中にあつた日本人共同体に対するある種の幻想が揺らいでいく過程が描かれ、特に終盤においては「日本人の間には、又いつものような個人主義と、極度に人を嫌う嫌悪感がごつちやになつて、互いに眼で憎み、心で猜疑して人間の根性の底の底までさらけ出したまま蛆虫のように蠢いていた」といった言語化がされ明確な形をとるようになっていったとする。また藤原が夫に代わり、強く家族をけん引する女家長としての役割を果たそうとすること、また赤ん坊である娘咲子の生存について、足手まといになることから素直に喜ぶことができないなどの描写に注目し、「家族」という単位においても、既存の観念の揺らぎが見受けられると指摘する。²⁶

これらのことから成田は藤原の『流れる星は生きている』には「国家」と「家族」のまとまりに疑問を投げかける可能性をはらんでいたと考察している。しかしながら藤原は帰国を境にそうした日本人への疑問が「青々とした、緑の松や、黒く木の茂っている山」といった表現に代表される日本的なるものへの迎合によって消えてゆき、再び妻として、母としての役割に入り込んでいく姿が描かれるのである。

末益 はこうした成田の議論を踏まえた上で『流れる星は生きている』は、藤原の明敏な観察眼によってとらえられ、それらが思考として整理されないまま、断片的挿話として作品に現れているとし、それらが引揚げを理解するうえで重要な証言になりうるとした。しかしそうした側面が、後のメディア化や出版の過程で「母もの映画」の文脈に取り込まれ、家族愛や母の犠牲といった側面が強調されることで薄められた点は見逃せないとした、²⁷また

「注目すべきは、作者である藤原自身も、戦後日本社会で暮らし、子どもたちを育てていく中で、上記のような読解のしかたに接近していったことである。これは蘭の指摘したように、個人の記憶は特権的なものではないことを示している。しかし、『流れる星は生きている』は引揚げのありのままの記憶が固着した作品であると受けとめられたからこそ、カノンとして現在も読み継がれているのである。」²²⁾としてたとえ経験直後に書かれたものであったとしても、その読解や解釈は当時のまま維持されるわけではないこととノンフィクション作品という枠組みが読者に与える影響について語られる。

一章において「日本人」を同じ民族として手を差し伸べるという「国民救済」のナラティブが引揚げ者や中国残留孤児を包摂し、その表象を作り上げていることについて述べたが、二章においてはその引揚げ者像が『流れる星は生きている』という文学作品の中でどのように表れているかについて検討した。

本作では極限状況における日本人共同体の矛盾や、家族という枠組みの揺らぎを描き出した。その矛盾や揺らぎはいわゆる「戦争の傷」、「引揚げの悲劇」として扱われ、作品が帰国と家族再統合の物語に収束していく過程によって、その傷が癒されていくのである。本来、この作品には一面的な見方を拒むような描写も存在するものの、度重なる改訂やメディア化によってそれらが捨象され、より純粹な「国家と家族の再生」という物語へと収斂されていった。

また『流れる星は生きている』を引き揚げ文学において重要な位置を占める作品にした要因でもある、「ありのままの記憶」という概念にも注目したい。

『流れる星は生きている』でも『大地の子』でも、作者自身または取

材対象の体験に基づく「事実との接点」が、作品の価値を担保する要素として強調されてきた。『流れる星は生きている』は、著者・藤原てい自身の引き揚げ体験を「ありのままに」綴った記録として受容され、文学性よりも記録性・証言性の側面から高く評価された。一方、『大地の子』もまた、山崎豊子による徹底した現地取材や残留孤児への聞き取りを基盤とし、膨大な資料と証言を重ねて構成された「事実に基づくフィクション」として称揚された。これらの評価は、戦後日本社会が「語りうる戦争体験」を事実の再現性によって正当化しようとした文化的傾向を反映していると言える。しかし、同時にその事実への過剰な信頼は、記憶の再構成性や語りの主観を覆い隠してしまう危うさを孕む。両作品における「事実の語り」は、証言としての重みとフィクションとしての創造のはざままで、戦争記憶をどう表象すべきかという根源的な問題を浮かび上がらせている。

ここまで引揚げ文学作品の個々の物語において、戦争による家族の分裂―引揚げによる家族の復活が描かれていることを述べた、これは南の述べた戦争による国民の揺らぎ―引揚げによる国民の再構築という図式の具体形と言えるのではないだろうか。

このような文脈において、中国残留孤児の存在は異国に取り残されたが故の苦難と日本国、家族の合流という視点でしか受け取られず、数は少ないが中国に残る決断をした人々はもちろんのこと、日本に帰国した人たちの苦難については目を向けられることがなかったのである。

ここまで、国家日本人という大きな文脈に包摂される引き揚げ者、残留孤児たちについて取り上げてきたが、戦後文学作品の中にはそうした価値観を相対化し引揚者、残留孤児それぞれについて語るものも存在する。次節ではその一例として、相星雅子『みなみのポプラ』収録作品を

取り上げ分析していきたい。

3. 相星雅子『みなみのポプラ』から見える残留孤児たち

相星雅子は1937年に旧満州・大連で生まれ、1946年に父母の故郷である鹿児島市に引揚げた。代表作に短編集『みなみのポプラ』(1989)²⁹『下関花嫁』(1990)などがある。二つとも引揚げ戦争体験を基に書かれた小説作品であるが、出版されたのは体験からおよそ40年の時を経てのものである。

『みなみのポプラ』収録作品は『敗北』『夜汽車』『みなみのポプラ』『転生』『白い花』『分身』『遠い町』『光景』『結び目』『時代』の十作品であり、このうち直接中国残留孤児をテーマに取り上げているのは『遠い町』『光景』『結び目』の三作品である。

しかし短編はそれぞれ独立しているわけではなく、テーマを通したつながりがあると考えられるため、全体を確認しつつ分析していきたい。

疋田は相星の作品に通底するものとして、母国に帰還を果たしてもなお拭いきることの出来なかつた非定住者感覚があるとす。これは表題作『みなみのポプラ』に顕著に表れており、地域社会における引揚者の細やかな拒絶を子供である薫子の視線を通して鮮明に描かれている。

彼女にとって満州は生まれ育った故郷であり、そこからの引揚げは帰還ではなく強制的な移住である。内地に「帰りつきさえすれば」と信じていた大人たちとは異なり、薫子の目に映る日本社会は、侮蔑と排他のまなざしに満ちた異郷であった。引揚げ直後の港での窃盗の場面に象徴されるように、彼女は「祖国」に受け入れられない現実を突きつけられる。鹿児島村では、閉鎖的な共同体の中で引揚民が好奇と偏見の対象となり、薫子は村人の噂や方言、価値観のすべてに強い嫌悪と違和感を

抱く。その感情の根底には、満州で培われた言葉や生活様式が否定される痛みと、自身の存在をどこにも位置づけられない不安がある。

またその侮蔑、好奇の視線には女性性にかかわる問題が付き纏とう。日常生活であったり、生き残るために女性たちが行った選択を、ふしだらであるからと本人の問題に還元してしまう。引揚げ者たちは必ずしも戦争の被害者として、日本人たちから暖かく受け入れられたわけではなかったし、引揚げ者自身もそのことを積極的に語ろうとはせず自分の中にその苦しみを留めておくことで、何とかその後の生活の均衡を保とうとしてきたのである。このことはPTSDによって夫を刺してしまう女性を描く『敗北』、独身女性たちが差し出しを防ぐための仮の結婚をテーマとした『下関花嫁』などでも示されている。

このように相星は引揚げ者たちの被害体験を、日本人全体が経験した戦争の悲惨さという共通体験に帰属させることを避けている。戦争の幕引きの後も引揚げ者、女性と言った弱く少数の立場にある人間が社会の中で孤立や苦しみを抱えながら生きていくことを語るのである。

しかしながら相星の作品は、単に自身や同じ立場にある「弱者」としての引揚げ者の被害体験を登場人物に仮託したものばかりではない。植民地支配下にあった中国人たち、また同じ日本人でありながら他人に生き残りのために犠牲にされた人たちにもしばしば目が向けられる。これらは一人の人間が被害者としての属性を持つのではなく、加害者的な側面をも同時に持っていることを示しているともいえる。

中国残留孤児をテーマにした『遠い町』『光景』『結び目』などの作品群もその一例である。戦争後すぐ帰国した引揚げ者たちと中国残留邦人の運命は紙一重のものであるが、普段はそのことに目を向けることがないまま過ごす人、あるいは生き残るため能動的に子供を他人に売り渡す

人などを描くことで、日本社会から隔絶しどう生きているのか知られることもない中国残留邦人たちの存在を浮き彫りにしている。

『遠い町』では弟タクを中国人の朴に「譲ってほしい」と言われる母の動揺や、生活物資の物々交換に象徴される植民者と被植民者の関係が丁寧に描かれる。自分が連れて行った弟が戻らぬまま夜を迎える場面では、母が生活のために弟を手放したのではという疑念と知らず知らずのうちには弟を犠牲にしたという悲しみが表現されている。その思い出が中国残留孤児の肉親捜しのニュースを聞いた主人公の胸に痛みを伴って掘り起こされ「中国残留孤児たちは今年も海を越えてくるだろうか？あの遠い町から」³⁰という独白で締められる。

『光景』と『結び目』もう一つの『光景』は連続した作品である。7歳の少女・温子の視点から引揚げの混乱と喪失を描く。長い無蓋列車での旅の末、目的地の葫蘆島に着いた温子は、家族のために良い席を取ろうと弟・貞二を連れて先に大型船に乗り込む。しかし、周囲では中国語しか聞こえず、誤って別の船に乗ったことに気づいた温子は慌てて弟と共に船を降り、間一髪で家族のいる引揚げ船に乗り込む。数十年後、新聞に掲載された中国残留孤児の名簿の中に「タチカワセイジ」という名前を見つける。その名前は温子自身の弟の名前と全く同じであり、かつ家族の情報として挙げられた姉は温子であった。その記事にまるで同じ世界に全く別の人生を歩んだ自分と弟がいるような感覚に陥った温子は、兄・祥雄に電話で事実を確認する。祥雄の話によると、その名は当時弟と親しく遊んでいた「タキガワセイジ」という少年のもので、温子たちが乗船する際に彼も後を追ったが、混乱の中で引き離されてしまったのだという。温子はその事実を直接伝えるために、「タキガワセイジ」に会いに行くことに決める。

『結び目―もう一つの光景』では温子の視点であることは変わりないが、当時を忘れていた温子や弟と違い、船内で「あの子を知らないか」と問われながらも、とっさに「知らない」と答え、その記憶を長く封じていた祥雄。「タキガワセイジ」が何を思っただ日本に家族を探しにやってきたのかを示した温子宛の手紙などを通して、他社に大きな影響を与えた選択とその結果が、今までそれを認識することのなかった温子の前に現れるような構成となっている。

これらの作品は人間の加害者・被害者の側面に言及しているに留まらない。同じような立場にある・あった人間であっても、選択一つでその後大きな違いが生まれ、もしこうであったらという後悔の念が人生に付き纏うのである。セイジは中国で養い親と過ごし妻を持ってもお、実の姉と思いこんだ温子への情愛を捨てることが出来ず、苦しんでいた。セイジは真実を知ったのち中国へと帰っていくが、そこには真実を知らないまま費やした数十年の時の流れが重くのしかかっている。

相星の作品における中国残留孤児の表象は、国家的・集団的な「引揚げの記憶」に回収されることのない、きわめて個人的で断片的な記憶の在り方として提示されている。彼女の描く残留孤児は、国家や民族といった大きな枠組みの中で救済や同情の対象としてではなく、戦後社会においてもお続く喪失と罪責の記憶を媒介する存在として機能している。相星の作品の大きな特徴として、前述したように満州の引揚げ体験から40年の歳月が経って書かれていることが挙げられる。どこまでが自身の体験談、あるいは見聞きした出来事であるのかが明確ではなく、その点も前節の『流れる星は生きている』と異なっている。

実際に相星は自身の引揚げの記憶について多くの穴があるとし「歳月に蝕まれ消されていった膨大な記憶のところどころに、今もまだ数多く

の断片が残されている。それは幸いにも、何年、何十年かの周期にしろ、口の端に上るとか、書かれるとかいう虫干し作業がなされたことよって、辛うじて保たれてきたのだろう。欠落した部分があるつど新しい想像で補強された、記憶と捏造の複合体としてであったとしても」²⁸と語っている。また『夜汽車』『白い花』のように自分とは全く違う立場の登場人物に自身を仮託することもあり、あくまでフィクション、物語であるという姿勢は明白にしている。

一方で作品が自身や実際に見聞きした情報の上に発展して作られたことも間違いはない。『みなみのポプラ』は相星が鹿児島での最初の数ヶ月を暮らした伊集院を舞台にしている。『光景』についても、船の出航後子どもが一人見つからないという話を相星は耳にしている。また、相星はあとがきにて兄、相星、弟という家族構成で育ったこと、兄や自分は引揚げや満州についておぼろげながらも記憶しているが弟は全く覚えておらずちようど境の世代であるのではないかと推測していおり、こうした事情は祥雄、温子、貞二の三人の設定にも反映されているように思われる。

『流れる星は生きている』が体験直後の証言として、戦争の惨禍と引揚げの混乱を「生の声」として記録したのに対し、相星の作品は戦後四〇年という時間の隔たりの中で、記憶が変容し、どこまでが実体験や見聞に基づくのか曖昧なかたちで語られている。その語りの距離は、単なる風化ではなく、時を経た記憶の再構築としての意味を持つものである。末益が指摘するように、記憶は特権的なものではなく、個人の体験や証言だけが真実を語るのではない。むしろ、出来事の「正しさ」だけでなく、それがどのように語られ、再構成され、共有されてきたのかを多様な語りの中で検討する必要がある。相星の作品はその一例として、戦後

の時間の中で形を変えながらもなお語り継がれる引揚げ体験を示しており、今後はこのような視点から、より多くの引揚げ文学、中国残留孤児文学を比較・検討することが、戦争と記憶の文学的継承を考える上で不可欠なのではないか。

ここまで引揚げ文学や、いわゆる内地から把握される中国残留邦人について取り上げてきた。ω章の展望としては、これまでの研究が十分に焦点を当ててこなかった、中国残留孤児の帰国後の生活や、日本社会との関わりに焦点を当てた文学作品を分析することで、彼らが直面した現実やその表象の特質をより深く考察していきたい。特に、帰国後の孤児たちが家族や社会との間で抱えた葛藤や分断を描いた作品を取り上げ、引揚げ文学やナショナル・ヒストリーの中で語られなかった「もう一つの戦後」の物語を掘り起こすことが目指される。

第三章 日本語学級での中国残留孤児 「ぼく、日本人なの？中国帰りの友達はいま…」

これまでの論述で中国残留孤児についての記述の多くが中国に取り残されたことによる苦難、あるいは日本への帰国までを描いてきたことについて説明してきた。戦後、満州（中国東北部）に取り残された日本人孤児は、1970年代から1980年代にかけて次第に帰国を果たしたが、その中には子どもたち、すなわち「残留孤児二世」も多く含まれていた。ここからは帰国後の中国残留孤児やその二世たちについて描いた文学作品の一例として、「ぼく、日本人なの？中国帰りの友達はいま…」手島悠介文・善元幸夫協力・遠藤てるよ絵（1984年、ほるぷ出版）を取り上げ分析していきたい。

本書を題材として取り上げた理由としては、帰国後の生活、とりわけ教育現場での困難を正面から取り上げた貴重な作品であることが理由として挙げられる。実際の日本語学級、「江戸川区立葛西小学校日本語学級・葛西中学校日本語学級」で起こった事例をモデルに、帰国者の学習上の困難、児童が言葉や文化の違いを理由にいじめに遭う様子が描かれ、当時の教育現場が制度的に十分な支援を提供できていなかった実情を浮き彫りにしている。

国全体の状況を見ると1970年代を通じて、国の責任において実施される対応としては、肉親捜しの問題に目を向けられ、帰国後の定着に関する言語、就労などの問題には触れられない状況であった。²³それに続く1980年代、帰国者の増加に伴い日本語学級の設置が進められはしたが、整備は不十分で、受け入れ体制や専門教員の配置も遅れていた。このような社会状況の中で本作は、帰国した子どもたちの心の葛藤や、教

育の現場で求められる支援の在り方を考えさせるものであり、帰国後の生活に焦点を当てる研究対象として適していると考えた。

また本作は現在絶版となっているものの、第30回青少年読書感想文課題図書に小学校高学年の部で選ばれたこともあり、啓蒙性に富み子供の成長に資する良書として、1984年当時の小学生などに読まれていたことがわかる。

本作の分析を通じて、帰国後の中国残留孤児やその二世たちの生活について調査し、それが文学作品の中でどのように表されてきたのか明らかにしていきたい。

1、登場人物たちの設定整理、実態との差異

まず刊行当時の中国引揚げ者の帰国、定着状況などについて概説、それを本書の描写と比較したのち、日本語学級の歴史について残留孤児二世の受け入れを中心に整理していきたい。

中国引揚げ者の帰国、定着状況については厚生省援護局が日中国交正常化以後までに永住の目的を持って帰国した260世帯の内234世帯を対象に実施した1986年中国帰国孤児生活実態調査³³の結果を参考にしていく。

帰国した残留孤児の年齢は40歳～53歳となっており、平均年齢は44.9歳である。

帰国者の家族構成は以下の通りである。

(家族構成)

| 区 分 | 世 帯 数 | 割 合 |
|----------------------|-------|------|
| 単 身 (孤児本人のみ) | 8 | 3.4% |
| 孤児本人+配偶者 | 7 | 3.0 |
| 孤児本人+配偶者+子供 | 187 | 79.9 |
| (うち子供 1人) | 19 | 8.1 |
| (2~3人) | 134 | 57.3 |
| (4~5人) | 31 | 13.2 |
| (6~7人) | 3 | 1.3 |
| 孤児本人+配偶者+子供+養親 | 7 | 3.0 |
| 孤児本人+配偶者+子供+子供の配偶者 | 1 | 0.4 |
| 孤児本人+配偶者+子供+子供の配偶者+孫 | 2 | 0.9 |

ここからもわかる通り、当時の帰国者は配偶者と子供を伴って帰国するケースが大半を占めていた。このことから中国残留孤児問題を語る上で、その二世や配偶者を取り巻く環境も見逃すことのできない問題と考える。

また居住地は都道府県別にみた場合、東京都が全体の27.8%と最も多い。これは孤児世帯の大都市志向も関わっていると考えられており、「援護50年史」³⁴では就労、就学等の支援が地方に比較して進んでいることに加え、新しい帰国者が不安から残留孤児の多い場所を望むという事情もあると分析している。

本作の舞台となる河西小学校も東京都に属しており、作中の帰国者の中には仕事探しの関係、また周囲の目を気にして東北地方から東京に移り住んだ家族も描かれている。

また住居については、公営住宅が最も多く、全体の76.9%を占め、親族と同居するというケースについては0.9%ほどであった。

就労状況については、男性が69.0%、女性が48.6%であり、不労者の理中としては「日本語が十分にできないから」が41.1%を占める。

日本語の習得状況としては以下の通りである。

(帰国前の日本語の勉強状況)

| 区 分 | 勉強していた | 勉強して いなかった | 無 回 答 |
|---------|--------|---------------|-------|
| 孤 児 本 人 | 18.0 % | 82.0 % | 0 % |
| 配 偶 者 | 9.8 | 79.4 | 10.8 |

(帰国年度別にみる帰国前の日本語の勉強状況)

| 区 分 | 全 体 | 58年度以前 | 59年度 | 60年度 |
|---------------|--------|--------|-------|--------|
| 勉強していた | 18.0 % | 17.5 % | 9.4 % | 32.0 % |
| 勉強して いなかった | 82.0 | 82.5 | 90.6 | 68.0 |

というように孤児たちの言葉の壁は想像以上に厚いことがわかる。また二世たちに関しては、まだ発育過程であるために親世代たちに比べれば言語学習がしやすく定着がしやすいという見方が主流であった。³⁵こ

のような見方自体子どもが発達や個性を無視した画一的な考えであるという指摘もあるが、実際に親の方が日本語の上達が遅く、家庭内では中国語、外では日本語を使うという家庭も少なからずあったことは間違えないようである。³⁶

作中では登場人物たち、主に中国残留孤児二世たちの家庭環境が細かく表されている。それを上で示したような実情を踏まえ比較する。本作は架空の人名、舞台を使いながらも現実のエピソードを多く含むノンフィクション作品の側面をもつ。その設定も実情を反映されたものと考えられるが、それが当時の状況と比較してどの程度一般化できる事例であったのかなどを検討していく。

以下本作の登場人物の家族構成、就労状況、日本語習得状況について作中で言及のあった人物たちを表にまとめたものである。

| 名前↵ | 家族構成↵ | 住居↵ | 就労、就学↵ | 日本語習得状況↵ |
|--------|----------------------------|-------|--|-------------------------------------|
| 崇山↵ | 父 母 妹 菊恵 | 公営住宅↵ | 父 町工場 ↵ 母 不明↵ 妹 河西小学校↵ | 崇山△↵ 父△ 夜間学校↵ 母×↵ 妹△ ↵ |
| 児玉明↵ | 父↵ 母↵ 姉 秀子↵ 姉 淳子↵ | 公営住宅↵ | 父 なし↵ 母 食堂のパートタイ ム↵ 秀子 職業訓練校↵ 淳子 河西中学↵ | 児玉明○↵ 父×↵ 母○↵ 秀子○↵ 淳子○↵ |
| 芳国↵ | 父↵ 母↵ 兄 慶栄↵ | 公営住宅↵ | 父 町工場↵ 母 不明↵ 兄 河西小学校↵ | 父△ 夜間学校↵ 母△↵ 兄○↵ |
| 丹羽たまみ↵ | 母↵ 弟↵ | 不明↵ | 母 バー↵ 弟 河西小学校↵ | 不明↵ |

実態調査では、帰国者の多くが配偶者と子どもを伴う「親＋子」の核家族で帰国しており、親族と同居するケースはほとんどなかったと示したが、本作でも登場人物たちは基本的に父母と兄弟姉妹で構成されており、親族との同居描写はない。この点において、本作は当時の家族構成を忠実に再現しているといえる。住居についても、公営住宅の比率が高く実情を反映していると考えられる。

また父親の多くが町工場勤務、母親は食堂やバーでのパート勤務など、低所得・不安定な職に従事している様子が描かれている。また、夜間学

校に通う父親も登場し言語の壁に苦勞する姿が描かれる。一方子どもの方は勉強はともかく日常会話レベルはこなすことができる児童が多い。高橋は中国帰国孤児、二世過程においては日本語習得状況の差から家族間のコミュニケーションが希薄になり家族不和、もしくは言語の接触量自体が不十分である事例が多くみられると指摘する³⁷が、作中でも主要人物の一人である児玉明の父親が日本語を習得することができず、日本語をうまく使い何とか社会に適應しようとする娘や妻との間に溝が生まれている場面が登場している。このように本作は多くの点で、当時の社会状況を投影したものと言える。

続いては、舞台となる河西小学校のモデルである江戸川区立葛西小学校日本語学級について日本語学級の歴史にも触れながらまとめたい。

1980年代半ばまでに来日した「残留孤児二世」らは、学齢期の子どもでありながら、親の意思によって突然の引揚げを経験し、生活の拠点を中国から日本へと強制的に移された。このような背景から、彼らは精神的・社会的に極めて脆弱な立場に置かれていた。³⁸

当時、日本政府の政策対応は極めて不十分であり、教育現場も受け入れ体制が整っていなかった。そのため帰国児童の入学拒否という事例もしばしば見られた。

また文部省は「子どもは環境に入れば自然と適應できる」とする立場を取っており、1983年に東京都内の教員たちが日本語学級の増設を求めて運動を始めるまで、法的な整備や制度的な保障はなかった。1985年に全国初の「高校入試特別措置」を導入し、ようやく教育行政が本格的に動き出すこととなった。³⁹

作中でも、日本語学級の善村先生(善元幸夫をモデルとする)が、日本語学級開設のために区の教育委員会に働きかけたり、進学のための奨学

金である引揚・帰国者子弟教育基金を作るために、他の先生方と協力し活動しているということが短く言及されている。

昭和60年(1985年)4月10日の衆議院文教委員会では「帰国をしてきた子供たちに対して日本語学級方式をとっている学級数はどのくらいありますか。」という佐藤徳雄委員の質問に対し、「帰国児童の日本語教育についてはそれぞれの学校の対応に委ねられており、多様な形があるがはっきりとした形での特設学級というものは、江戸川区の葛西小学校及び葛西中学校で、小学校に一学級、中学校に二学級置かれているものがある」という旨を回答している。⁴⁰

このように、日本語学級はごく一部の学校で試験的に設置されるにとどまり、多くの中国引揚者子女は言語の壁を抱えたまま通常学級に通うことを余儀なくされた。またそのような対応の多くは現場レベルのものとどまっておき、文科省など国レベルでは実態調査などもおぼつかない状況であったことがうかがえる。配慮が十分になされないまま、学習や生活適応が困難となり、深刻ないじめや排除が発生するケースも多かった。文化的な違いから名前を変えることを強要されたり、日本人と同調することを強いられるなど、同化圧力のなかで子どもたちは自己のアイデンティティを失い、精神的な孤立に追い込まれたのである。⁴¹

こうした状況下において国会答弁からも窺えるように葛西小学校・中学校は帰国者に対する日本語学級の先駆的な役割を果たしていた。1972年とかなり早期の創立であり、創立のきっかけとしては東京都での帰国者の増加から葛西小の近くに帰国者たちが住まう常盤寮が建てられていたことである。その親たちの子供たちがしっかりと日本での教育を受けられるような受け皿を作ってほしいという要望を吸い上げる形で日本語学級が作られた。そうした葛西小学校・中学校の日本語学級について

先述の佐藤委員は実際に視察をして国会に報告している。

報告では実際に体験した日本語学級の明るさや、教師と一体となって真剣に授業に取り組む様子などについて語った上で、子供たちが「自分を何人だと思っているか？」という質問に対して全員が中国人であると答え、日本人であると答えた生徒は一人もいなかったというエピソードについて触れている。^た

また生徒の作文の内容についても実際の作文をいくつか読み上げるという形で、生徒が抱えている中国への郷愁の思いについて伝えているが、特に考えるべき問題として以下の作文を挙げている。

いじめられたこと

なんでぼくをいじめますか

それは中国と日本　せんそうしました

日本まけた

中国かった

だからおまえのせいだといいました

ぼくはこたえました

なんでぼくのせいですか

ぼくはせんそうをしりませんです

ぼくのせいじゃない

ぼくはせんそうがはじまりのとき

ぼくはうまれていませんでした

いじめられた子供です。

このように葛西小学校は当時の数少ない日本語学級として、生徒たち
ちに明るい学びの場を提供する一方で、その児童たちの心には中国への

郷愁であったり、日本の生徒たちとの間にいじめや偏見といった溝から生まれる鬱屈など様々な感情を抱え込む場でもあったこと、その一端が表れている。

東京都の葛西小学校・中学校の日本語学級は、日本で最初期に帰国後の中国残留孤児の子どもたちを多数受け入れた教育現場であり、制度的支援の不備と向き合っていた。そうした実態を反映した本作が、当時の教育関係者の問題意識に沿う形で注目され、1984年度の課題図書に選ばれたことは、その社会的・教育的意義を裏付けるものと考えられる。

2、内容、構成の検討ー

1では本作の舞台、登場人物設定の検討から作品の意義について検討した。ここからはその具体的な内容について、それをモデルとなった実際のエピソードとの関連や他の作品主に『ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ ふるさとを中国にもつ少年の記録』¹⁾などと比較、それを踏まえて、視点や構成の意図などから本作の主題について分析していく。

まずは話の流れを説明することから始めたい。

物語は中国残留孤児二世の崇山が、日本人の子供たちから石を投げられるいじめを受ける所から始まる。崇山はそのいじめや偏見の目に苦しみ、中国への郷愁の念を強くしていた。そんな時同じく、二世の児玉明が転校してきた。

明は前の学校で嫌がらせを受けたことや父親が日本社会に馴染めず家族に当たることを繰り返すうちに、鬱屈を抱え荒んでいた。崇山が一緒に帰るよう声をかけるものの、ついいら立ってしまい崇山の足の不自由をあげつらうような発言をしてしまう。

崇山は悲しむものの、明の心に自分と同じくどうにもできない苦しみ

を抱えていることを感じ取る。明も家庭内の不和などからひねくれてしまっている自分を自覚し行動を悔いる。

明はその後謝罪して、崇山はそれを受け入れる。このことから徐々に崇山は、いじめをする人たちもその人なりの苦悩を抱えている。辛いことがあっても人間が好きであるという「人間愛」を抱くようになっていく。その気持ちは徐々に明にも影響を与えるようになっていく。

そんな中、日本語学級の生徒である芳国が川に溺れなくなってしまった。その間接的な原因は芳国と一緒にいた広林が上手く日本語がしゃべれず、助けを求めることができなかったことだった。善村先生はそのことに日本語を教えてきた教師として深く責任を感じ辞職を考えるようになる。しかし、生徒への授業や芳国の父親の言葉から自分が子供たちに、生きる力を教えていかななくてはならないと決意するようになる。

善村先生は「しばてん」という作品を中国からやってきた子供たち、とくに明と重ね合わせその心を少しでも解き放つために学芸会で劇を行うことに決めた。その劇の中で明は台本から外れて自分をいじめていた村人を許し、助けるために「俺は鬼の子、しばてんだ。」と叫ぶ。

そんな中、明の父の精神状態は悪化していき、明や母に暴力を振るうようになっていった。状況に追い詰められ、明の父は自殺未遂まで考えるようになるが、明のひたむきに父を支えたい、立ち直ってほしいという思いや担任である善村先生や、相談員の柳生さんなどの助けも借り再出発を決意する。

先述したようにこの作品で日本語学級の教師として登場する善村和夫は、実在の葛西小学校の教師である善元幸夫をモデルとしており、あらすじの内容やその他本作のエピソードの多くが、名前や細かな事実関係の違いがあるものの善元の体験に準じている。

そのエピソードは『国境を越える子どもたち…“引揚げ”の親と子の記録』⁴⁴や『日本語学級の子どもたち…引揚げの子どもが出会う〈日本〉』といった善元が関わった作品にも示されている。

『国境を超える子供たち』においてはタイトルが親と子の記録とされているように、主にロンシン（児玉明のモデル）やヨウジン（崇山のモデル）の細かな家庭環境や二人の親の中国での過酷な体験などまで多くの一致が見られる。例えばロンシンの父親のDVや再出発、ヨウジンの石を投げられたり、給食をトイレで食べさせられるといったいじめ、また作中でも一部登場した日本語学級の生徒たちの心境変化を綴った作文「いじめられられたこと（ヨウジン）」「人間はという人について書きます（ヨウジン）」「中国のおにさんのこと（グイヨン）」また、親学級の日本人の生徒たちの作文など四つが記載されている。作文の部分に関してはすべて実際に生徒に提出してもらったものを載せていることがわかる。

一方で異なる点としては、ロンシンの父親によるDV被害や、ヨウジンの身体、脳障害など対象年齢を小学生にしている都合からか、作品では実態よりもより軽度、深刻になりすぎないように配慮された点もみられる。

「日本語学級の子供たち」においてはその子供たちが日本語学級での学びを通してどう歩みだしていくのかについて学芸会での劇「しばてん」や校内音楽会で中国の伝統楽器「腰鼓」を披露することなどを通して語っている。こうした中国などを忘れて、日本にただ同化するのではなく、自分の根っこである中国も愛していくという姿勢は、作中の善村先生の特別授業などで語られたことと同一のものであることがわかった。

このように多くの点で実際に起こったことを描き出している本作であるが、前述した通り現実より意図的に軽い描写にしている部分や芳国の

死に関する部分、崇山や明の視点で物語が描かれている部分などがあり創作の面も大きく、より物語性に富んだストーリーになっている。

そこでこれから善元の著作である「ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ ふるさとを中国にもつ少年の記録」と比較しながら本作が読者の中国残留孤児二世たちのイメージにどのような影響を与えるか検討していきたい。

『ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ』は日本語学級の担任である善元の視点から、崇山のモデルであるヨウジンの姿を描いた作品である。「ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ」では、一貫して「教師である善元がヨウジンをどう見ていたのか」、そしてその認識の変化が日本語学級の教育にどのような影響を及ぼしたのかという観点からエピソードが語られる。ヨウジンは足と脳に重い障害を抱えていたため、当初は授業に取り組む意欲がないように見えたり、下級生を追い回していじめているかのように映っていた。しかし、ヨウジンが書いた作文や、聴覚障害や緘黙症をもつ児童に対して対等に寄り添う姿から、善元は自らが「弱者」「問題児」「支援対象」といった先入観でヨウジンを捉えていたことに気づかされる。この作品は、教育者として、また日本人や健常者としての視点のみに基づいて子どもを理解することの危うさ、さらに「いじめられている子どもが持っている世界を見る力」をテーマとしているといえる。

一方、『僕日本人なの?』では、語り手は教師側だけでなく崇山↓明↓善村先生へと視点が移行していく。崇山の障害描写をあえて抑えることで、中国残留孤児二世たちが直面する困難そのものに焦点を絞っている点の特徴である。また、崇山や明の視点に置かれることによって、彼らの置かれた境遇の苦悩や葛藤に読者が共感できるように構成されている。

そのうえで、最終的に善村先生の視点へ移行することで、読者の多くを占める日本人が、彼らにどのように向き合うべきかを考えさせる仕組みになっていると考える。

両作品の視点の違いは、読者に与える印象や作品の受容のされ方に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

『ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ』は、教師である善元の視点から描かれることで、読者は教育者の思考過程をたどりながらヨウジンを理解していく。初めは「問題児」「弱者」として一面的に見られていたヨウジンが、実は豊かな感受性と他者への共感を備えていることが徐々に明らかになる。その変化を追体験することで、読者自身も教師と同じように「偏見を持って相手を見てはいけない」という自省を促される。この場合、読者は教育的なまなざしを仮想的に体験しつつ、児童への理解を深める効果を得る。

一方、『僕日本人なの?』では、崇山や明といった子ども自身の視点から物語が始まるため、読者は当事者の苦しみや孤独に直接的に共感させられる。彼らの心情を追体験したうえで善村先生の視点へと移行することで、「では大人として、教育者として、また日本人として彼らにどう接するべきか」という問いが突きつけられる。この構成は、子どもたちの声にまず耳を傾けさせたうえで、その声を受け止める責任を読者自身に自覚させる効果を持っている。

つまり、両作品はともに中国残留孤児二世の姿を描いているが、前者は〈教師の気づき〉を通して偏見の克服を読者に促し、後者は〈児童の声〉を中心に据えることで読者に強い共感を喚起し、そのちに彼らへのを考えさせる構成となっている。視点の違いが、そのまま読者に対して「自省」か「共感と行動の喚起」かという異なる効果を生み出してい

るのである

3、結論

以上の検討を踏まえると、『ぼく、日本人なの？』は中国残留孤児二世たちの苦難を現実即して丁寧に描写しながら、彼らを単なる被害者や弱者としてではなく、彼らが直面した苦難や孤独を「生きた人間の声」として提示し、読者に共感と想像力を促す作品であることが明らかになる。崇山が障害やいじめに苦しみながらも「人間愛」を見いだしていく過程、また荒んでいた明が崇山との交流や善村先生の教育実践を通じて変化していく姿は、読者に強い共感を呼び起こす。そこに描かれるのは、帰国者二世の「異質さ」ではなく、むしろ彼らも同じように苦悩し、成長し、他者と関わりとうとする普遍的な人間としての姿である。

こうした構成は、残留孤児二世を理解するうえで単なる事実や統計以上に大きな意味を持つ。先に見たように、実態調査や行政答弁からは、彼らが直面した言語の壁、就労・就学の困難、社会的孤立といった現実が明らかにされていた。しかし『ぼく、日本人なの？』は、それを数字や制度上の問題として描くのではなく、具体的な子どもたちの心の声として提示することで、当時の読者、とりわけ子どもや教育関係者にとって身近で実感的な理解を可能にしたといえる。例えば芳国の死をめぐるエピソードは、言語の壁が命に関わる深刻な事態を招き得ることを強烈に印象づけると同時に、教師がその責任を痛感し教育のあり方を問い直す契機として描かれる。そこには「言語教育は単なる学力形成ではなく、生きるために不可欠な力を与えるものである」というメッセージが込められている。

また本作は、帰国者二世を日本に同化させるべき存在としてではなく、

彼らが持つ中国文化や背景を尊重すべき存在として描いている点でも意義深い。劇「しばてん」の上演や、作中で語られる中国を忘れるのではなく、根っことして愛していくという姿勢は、同化政策ではなく多文化共生への視点を示している。これは、日本語学級の善村先生の教育実践や善元幸夫の著作に通じる理念であり、帰国者二世を異文化理解の主体として位置づける試みであったといえる。

さらに『ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ』との比較からもわかるように、『ぼく、日本人なの？』の表現は、教師の気づきや偏見克服に焦点を当てた善元の語りとは異なり、子どもの内面を前面に出すことで、読者に直接的な共感を促す仕組みを持っている。これは、教育関係者向けの実録的な記録から一歩進み、一般の子ども読者や広い社会に彼らと同じ目線で苦しみを感じ取る経験を提供する役割を果たしている。この点において本作は、帰国者二世を理解の対象ではなく共感と連帯の対象として提示する、新たな表象を生み出したと位置づけられる。

総じて、『ぼく、日本人なの？』が私たちに提示する中国残留孤児二世の表象とは、制度や社会の中で「弱者」として扱われる存在ではなく、困難を抱えながらも他者との関係の中で成長し、人間としての尊厳と可能性を持つ存在である。彼らは単なる帰国者の子どもではなく、日本社会に新しい課題と問いを投げかける主体であった。本作は、その姿を子ども読者にも伝わる物語のかたちで提示し、当時の日本社会に彼らとどう向き合うのかという課題を広く共有させる役割を果たした。

今日の私たちが本作を読み返すとき、そこに描かれた表象は過去の歴史的出来事理解にとどまらない。むしろ、異なる文化や言語的背景を持つ子どもたちが共に学び、暮らす現在の社会においても重要な示唆を与えている。すなわち『ぼく、日本人なの？』は、中国残留孤児二世の

姿を通じて、多文化共生社会における教育と共感のあり方を問い続ける作品であると結論づけられる。

第四章 各章のまとめと結論

本稿は、中国残留孤児および帰国者をめぐる文学・表象・社会的語りのあり方について検討してきた。第四章では各章の論点をまとめて結論としたい。

第一章では、山崎豊子『大地の子』の執筆背景と取材方法、そして作品が形成した中国残留孤児像の特質を検討した。山崎は膨大な取材を行ったが、物語の骨格は執筆前に既に定められており、取材は既定の構想を補強する形で用いられたと指摘される。作品は「事実に基づく再構築」と宣伝され社会的影響を広げたが、実際には事実の選択や改変があり、当事者からは一般化の危険性を問う声も上がった。遠藤誉『卡子』との類似問題をめぐる裁判は、創作における事実利用の倫理を考える契機ともなった。『大地の子』は問題を社会に知らしめた功績を持つ一方、典型的な「帰属」の物語として多様な実態を覆い隠した側面も否めない。以上より、同作品はフィクションの社会的影響力と、史実・証言との緊張関係を示す重要な事例であるといえる。

第二章は引揚げ文学作品における語りがナショナルアイデンティティや家族の再生に接続される構造について示し、具体的に『流れる星は生きています』と一章の『大地の子』の共通する点を考察することで引揚げ文学というジャンルの検討を行い、その中に吸収される中国残留孤児について検討した。そのうえでそれらを相対化する試みとして『みなみのポプラ』を取り上げ、中国残留孤児や引揚者の経験が単に国家的・家族的再生の物語に収斂されず、個人の記憶や感情の複雑さ、社会との摩擦を伴った帰国後の現実が描かれることを示した。相星の作品では偶発的な分断や再会、加害者・被害者双方の立場を持つ複雑な人間関係を描くこ

とで、中国残留孤児像の多層性が明らかになる。

第三章では、中国残留孤児二世の生活と教育現場での困難を描いた『ぼく、日本人なの？中国帰りの友達はいま…』を分析した。本作は実際の江戸川区立葛西小・中学校日本語学級をモデルに、言語の壁やいじめ、家庭内の葛藤など、帰国者二世が直面した課題を丁寧に描写する。登場人物の設定は実態調査と概ね一致しており、家庭構成や就労状況、言語習得の差が教育・生活に与える影響が示される。一方で物語性を持たせるため、障害や深刻な事態は軽度化され、読者が共感しやすい構成となっている。また、視点を児童↓教師へと移行させることで、当事者の苦悩を体感させつつ、読者に教育者や日本社会の対応を考えさせる工夫がなされている。事実の記録に基づく描写と物語的演出を組み合わせている。

このことで帰国者二世を単なる弱者としてではなく、困難を抱えながら成長し他者と関わる主体として示している。絶版であり手に取られる機会が減少しているものの、現代社会においても共感と学びを提供する作品である。

こうした分析の中で私は表象としての中国残留孤児を語ることの難しさを感じた。

私は第一章の『大地の子』についてごく少数の事例が物語・作者の都合により描かれない多数の残留孤児をも代表することになっているという批判を取り上げたり、逆に三章の『僕日本人なの？』においては、作品の優れた点として現実の帰国者像を反映している点を述べ、比較を行ったりもしてきた。

しかし必ずしも「現実」や「事実」に忠実な語りだけが必要とされているのかというともいえないと考えた。個人の記憶は必ずしも真

実だけを表わしたのではないが、それでも事実をもっとも反映している作品は、本人の体験談を綴ったノンフィクション作品であるという点に異論はないかと思われる。だが、戦後80年が経過し中国からの帰国者たちも年を取っていく中で、そうした単に個人に依った体験に基づくものの、山崎の指摘するような大きな物語を伴わない作品が世間の注目を浴びることははや難しいのではないかと考えた。本稿では詳しく取り上げなかったが、NHKでドラマ化を果たした『あの戦争から遠く離れて』はノンフィクション作品ではあるものの、娘が父の足跡を丹念に調べたうえで父の視点からその人生について記す前半部分、自身の中国での体験や、国家賠償訴訟などについて述べた後半の現代パートに分かれる特異な形である。ある意味、中国残留孤児問題を概観する作品と言え、世代を超えて記憶を継承する試みや工夫を施している作品なのである。

『流れる星は生きている』のヒットには時代背景や社会的文脈が大きいくかかわっていることに触れたが、多くの日本人にとって中国残留孤児問題は過去のものとなっているためである。

また二章『みなみのポプラ』でも触れたように個人の記憶や正しさというのは必ずしも絶対的なものではなく、むしろそこから離れて自由に語ることも価値観を相対化する試みにつながる事例も多く存在するのである。

文学は現実の写し鏡ではなく、現実と想像の間を往還しながら、社会が自らをどのように記憶し語ろうとするかを映し出す営みである。一方で、近年顕著になりつつある歴史修正主義的な言説に対しては、慎重かつ確かな知識に基づく対抗が求められる。そのためにも私たちが取り組むべきは、中国残留孤児を描いた作品がどのように語りを形成し、いかなる形で社会に共有されてきたのかを、多角的に検証することと考えた。

具体的には、より幅広い作品を対象に、その記述が史実とどの程度整合するのか、また各作品がどのような歴史的・文化的意義を持つのかを丁寧分析し、初学者にも理解しやすい形で体系的に整理することが重要である。

このような努力によって、国家や日本人たちが全員が戦争の被害者であるという意識から目をそらしてきた帰国者たちへの責任、多様な背景を持った人々を異物として排除してしまうという普段は目をそらしてしまいがちな一面にも光を当てることが出来るのではないだろうか。戦争や多文化共生が決して他人事ではない今の時代において、この試みはなお重要な意義を持つと考える。

終わりに

本稿では日本の文学作品を中心に、中国残留孤児および帰国者をめぐる表象のあり方を検討してきた。とりわけ、戦後日本社会が彼らをどのように語り、どのように記憶してきたのかを明らかにするため、フィクション・ノンフィクション問わず複数の作品を取り上げた。しかし、第四章で見てきたように、残留孤児の語りは「事実の再現」だけでは理解しきれず、作品という形式を通じて社会にどのような意味を与えられてきたかという問題が避けて通れないことも明らかになった。

本稿では対象を日本文学作品に限定したが、この問題については日本側だけでなく、中国人作家によって描かれた作品も少なくない。たとえば敵歌苓『小姨多鶴』はその代表例であり、戦後の混乱期における日本人残留者の生活を、中国社会の内部から、かつ複数の立場にまたがる視点で描き出している。同作では、残留女性や子どもが中国の家族制度・共同体のなかでどのように受け入れられ、あるいは異物として扱われたのか、その日常的な葛藤や感情の揺れまでもが丁寧に描写される。そこには日本側の作品では必ずしも十分に取り上げられてこなかった、受け入れる側の社会の論理や情感、国家政策と個人生活の齟齬といった視点が示されている。

このような中国側の文学作品を併せて検討することで、日中双方が残留孤児・残留邦人の経験をどのように語り、そうした越境的な視点を取り入れることで、残留孤児をめぐる記憶の構造や表象の多層性がより深く理解され、また、それぞれの社会がこの歴史をどのように継承しようとしているのかをよりの確に捉えることが可能になると考えられる。

- 1 『大地の子』ふたたび 二年の歳月をかけたついに甦える日中友好の証」山崎豊子 文藝春秋 1995年 P.289
- 2 『文化交渉の視点から見る山崎豊子『大地の子』李瑞華 2021-04-26 巻 40,p.131
- 3 作家の使命私の戦後 山崎豊子自作を語る 山崎豊子 1 2009.10 新潮社
- 4 3に同じ
- 5 戦争への激しい怒り 清原康正（文芸評論家）『大地の子』（山崎豊子） <https://books.bunshun.jp/articles/-/6445> 7月 29日
- 6 山崎豊子『大地の子』の成立：作者の取材記録と文献資料を手掛かりとついで 唐楚輝 2021/03 『國文学』 p. 348～349
- 7 山崎豊子『大地の子』論：陸一心の人物像をめぐって 唐楚輝 跨境：日本文学研究』2020／12 P.208
- 8 作家の使命私の戦後 山崎豊子自作を語る 1 山崎豊子 2009.10 新潮社 P.111
- 9 表象される「中国残留孤児」大久保明男 アジア遊学 特集：中国残留孤児の叫び―終わらない戦後 勉誠出版 2006年 P.160・161
- 10 中国残留孤児を真に理解しているのは誰か―『大地の子』と『卡子』を読んで 劉奔 1998年 12月 11日『週刊金曜日』（247号） P.27
- 11 10に同じ P.29
- 12 裁判例結果詳細 裁判所『Courts in Japan https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jip/594/012594_hanrei.pdf P.10 8月 13日
- 13 12に同じ
- 14 山崎豊子問題小説の研究：社会派「国民作家」の作られ方 『大地の子』と中国残留孤児―フィクションとノンフィクションの狭間を考える― 2002 鶴飼清 社会評論社 P.101
- 15 14に同じ P.114～115
- 16 落葉帰根願う残留孤児たち 大久保明男 朝日新聞 1999年 11月 9日 P.5
- 17 山崎豊子『大地の子』の構想に関する考察：「中国残留孤児」当事者の評価を手掛かりにして 唐楚輝 國文學 巻 106,p.305 2022-03-01
- 18 10に同じ p.27
- 19 総論 課題としての中国残留日本人 中国残留日本人という経験：「満洲」と日本を問い続けて／蘭信三編 勉誠出版 2009.9 p. 41～

- 20 引揚げ文学論序説…新たなポストコロニアルへ 朴裕河 人文書院
2016.11 p.152
- 21 14回²⁾
- 22 想像される「中国残留日本人」ー「国民」をめぐる包摂と排除 南
誠 中国残留日本人という経験：「満洲」と日本を問い続けて／蘭信
三編 勉誠出版 2009.9 p. 48～58
- 23 ジャパンナレッジ 日本大百科全書
- 24 継続する植民地主義…ジェンダー／民族／人種／階級／岩崎稔「ほか」
編著 青弓社 2005.2
- 25 帝国解体という経験：「引揚げ」と「抑留」／成田龍一著 岩波
講座アジア・太平洋戦争・4／倉沢愛子「ほか」編集委員 岩波書店
2006.2 p. 89～96 「戦争経験」の戦後史：語
られた体験／証言／記憶／成田龍一 シリーズ 戦争 岩波書店 2010.2
- 26 引揚げ」に関する序章 成田龍一 思想, 2003-11 (955), p.149-174
岩波書店
- 27 藤原てい『流れる星は生きている』『灰色の丘』をめぐる「引揚げ」
の記憶 末益,智広 巻 330 p.20～42 刊行年月 2018-02-28
- 28 戦後日本社会における「引揚げ文学」と家族愛 末益, 智広千葉大
学人文公共学研究論集 巻 38 2019-03-28 p.142～151
- 29 みなみのポプラ 南日本文学集 1 三笠出版社 相星雅子
- 30 29 回²⁾ p.155
- 31 文字の花嫁 下関花嫁 相星雅子 高城書房出版 1990.3 p.4. 5
- 32 課題としての中国残留孤児 蘭信三 中国残留日本人という経
験：「満洲」と日本を問い続けて／蘭信三編 2009.9 東京：勉誠
出版
- 33 厚生省援護局 中国帰国者（孤児）生活実態調査に関して 1986年
中国帰国孤児生活実態調査の結果 ([https://www.kikokusha-
center.or.jp/kikokusha/tohkei/1986/19860201.pdf](https://www.kikokusha-center.or.jp/kikokusha/tohkei/1986/19860201.pdf)) 2025.1.7. 12
- 34 援護 50年史 厚生省社会援護局 東京：ぎょうせい 1997.3
- 35 中国帰国者に対する日本語教育の展開ー所沢センターの実践 中国
残留日本人という経験：「満洲」と日本を問い続けて／蘭信三編
2009.9 東京：勉誠出版
- 36 中国残留日本人孤児に関する調査と研究. 下 / [関亜新,張志坤][原
著]: 【トウ】岩,浅野慎一 監訳 不二出版 2008.12
- 37 日本生まれの帰国の子供が直面する問題 高橋朋子 中国残留日本

人という経験…「満洲」と日本を問い続けて／蘭信三編 2009.9 東京・勉誠出版

³⁸ 日本語学級の子どもたち…引揚げの子どもが出会う〈日本〉／小沢有作 編著 東京・社会評論社 1983.8

³⁹ 1980年代半ばまでに連れられて来た中国残留孤児第二世代・「子どもたち」の初期定着に注目して 張龍龍 早稲田大学大学院文学研究科紀要 巻 64, p. 99-114, 2019-03-15

⁴⁰ 第102回国会 衆議院 文教委員会 第5号 昭和60年4月10日 国会会議録検索システム

<https://kokkai.ndl.go.jp/#/detail?minId=110205077X00519850410&cu rent=6> 2025-7-18

⁴¹ 39に同じ

⁴² 40に同じ

⁴³ ほんとはネ、いじめっ子じゃないよ ふるさとを中国にもつ少年の記録 善元幸夫 ポプラ社 1984.

⁴⁴ 国境を越える子どもたち…「引揚げ」の親と子の記録 善元幸夫、押村敬子編著 社会評論社, 1986.2

① 32字×25行＝800字

② 800字×52ページ＝41600字